

老年論

On the Old Age

岡崎 強

Tsuyoshi Okazaki

摘 要

序説では、『高齢社会白書』（令和2年版）により、高齢化率、高齢者世帯、暮らし向き、就労状況などを中心にして、少子高齢社会の実態を把握した。

生活保障では、7割以上の高齢者が今の暮らし向きについて、心配ないと答えているが、実情はどうか、他のデータも参考として検討してみた。

ただ、平穏な日常に予期せぬ事態が生じた場合、暮らし向きは変わってしまう。老後破産に近い状態になった時、私達は安心して継続できる生活ができるかどうか、再度、問題として取りあげた。

老年的超越に関しては、先ず内容把握と高齢期における発達モデルとなりうるかどうかを検討してみた。

キーワード 老後破産 老年的超越

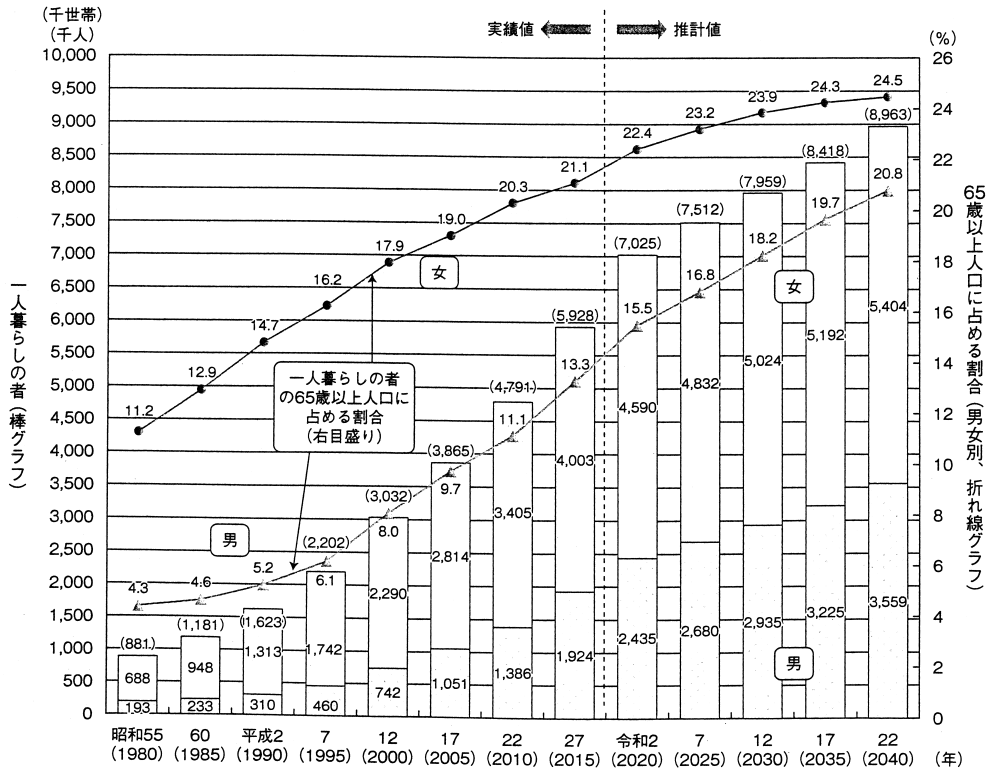
． 序説

今、わが国の高齢化率は28.7%となり、国民の3.5人に1人が65歳以上の者となる。65才以上人口は、「団塊の世代」が75歳以上となる令和7（2025）年には3,677万人に達すると見込まれている。そして、令和47（2065）年には高齢化率が38.4%となり、国民の約2.6人に1人が65歳以上の者となる社会が到来すると推計されている。⁽¹⁾

着実に少子高齢社会へと進展していることが分かる。少子化対策等の施策もなされているが、少子化の勢いも止まらない。平均寿命も伸長し、令和47年には、男性84.95年、女性91.35年になるとの予測である。正に人生90年の時代が到来するであろう。

半世紀後の社会を可視化することはできないが、上述したような社会へと歩み始めていることは確かだ。少子高齢化が進めば、当然、現役世代の負担も高まる。出生数の減少と共に、年少人口も減り、結果として生産年齢人口の減少となる。平成27（2015）年には、65歳以上の者1人を支える現役世代は2.3人であったが、令和47年には、65歳以上の者1人に対して、1.3人の現役世代が支えていく社会となる。正に肩車型の社会となろう。

そして見逃せないのが、高齢者世帯の実情である。65歳以上の者のいる世帯は、平成



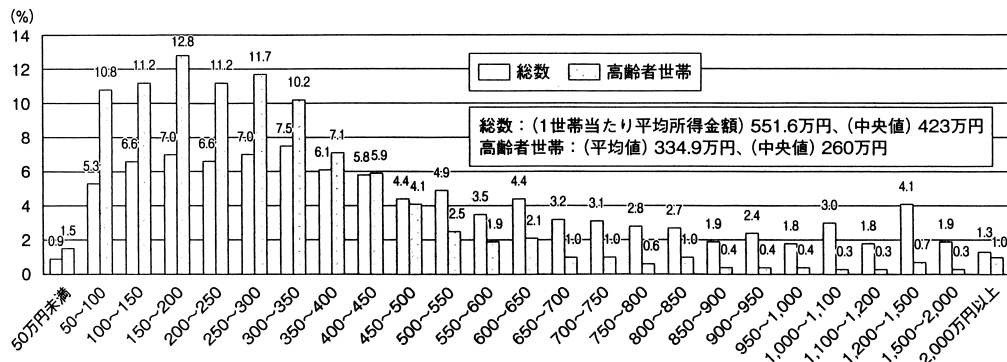
資料：平成27年までは総務省「国勢調査」による人数、令和2年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（全国推計）2018（平成30年推計）」による世帯数
 (注1)「一人暮らし」とは、上記の調査・推計における「単独世帯」又は「一般世帯（1人）」のことを指す。
 (注2)棒グラフ上の（ ）内は65歳以上の一人暮らしの者の男女計
 (注3)四捨五入のため合計は必ずしも一致しない。

図1 65歳以上の一人暮らしの者の動向
 内閣府編『高齢社会白書』（令和2年版10頁より）

30（2018）年、2,492万7千世帯と、全世帯の48.9%を占めており、世帯数の半分近くが65歳以上の者のいる世帯である。その中で、夫婦のみの世帯が32.3%で、単独世帯27.4%を合わせると6割に近い数値となる。特に65歳以上の一人暮らしの増加傾向が著しい。図を掲示した。

次に、高齢者の暮らし向きについてみてみよう。経済的な暮らし向きに心配ないと感じている60歳以上の者は74.1%と、かなり高い割合を示している。65～69歳をみると、心配ない人は72.4%で、家計にゆとりがない、また苦しい人は25.6%と、4人に1人は苦しい状況にある。そして、高齢者世帯の所得階層別分布をみると（図2参照）⁽²⁾、150万～200万未満が12.8%で最も多い。50万～300万未満の世帯は、合計で59.2%となり、6割近い人が300万未満の所得しか得ていない。

就労状況を見ると、令和元（2019）年には、65～69歳で、男性は58.9%、女性は38.6%の就業率となっている。75歳以上の人でも10.3%の就業状況である。65歳以上で働いている人はかなりの数と言ってよい。そして、約9割の人が高齢期でも高い就業意欲を持つ



資料：厚生労働省「国民生活基礎調査」(平成30年)

(注) 高齢者世帯とは、65歳以上の者のみで構成するか、又はこれに18歳未満の未婚の者が加わった世帯をいう。

図2 高齢者世帯の所得階層別分布

内閣府編『高齢社会白書』(令和2年版17頁より)

ている。⁽³⁾ 特に高齢期は人の一生の晩年期に相当する。いうなれば、人それぞれの人生の完成期を迎えたと言ってよいであろう。

例えば、ある製品の仕上げを行うに当って最後の部品を調達し、それを製品に嵌め込んで完成品を仕上げる。最後の部品がピッタリと合って完成品ができあがる。もしその部品に不具合があるとすれば、製品は完成に至らないであろう。

同様に、私達は時の経過と共に老年に到り、人生の完成期に直面する。誰もが穏やかで、幸福な晩年を送りたいと願うであろう。しかし、時として不運で不穏な出来事に遭遇し、エリクソンの指摘する絶望の状態に陥ってしまう。

エリクソンは老年期の目標として、統合を掲げた。目標に辿り着いた人は、これまでの人生に不平・不満もなく、一生を終えることが可能である。けれども絶望に近い現実に直面し、なす術もない老齢期に苦悩している高齢者も存在する。

上述の様々なデータを参考としながら、老齢期のことを考えていこう。

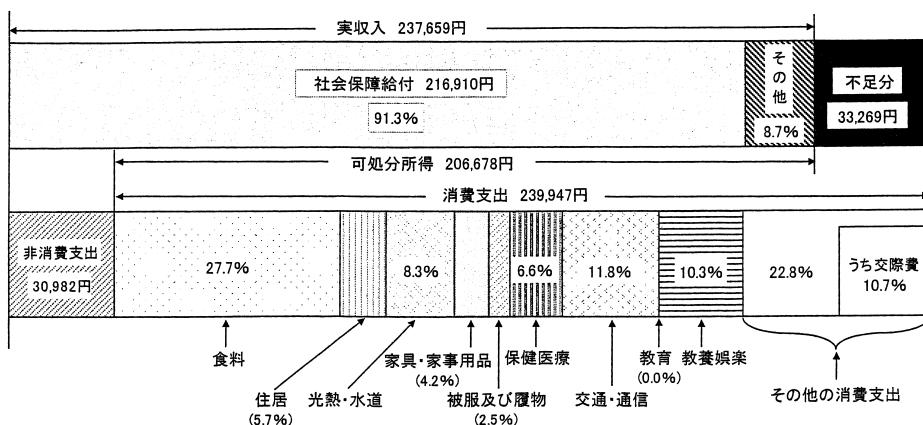
生活保障について

高齢期の暮らし向きについては、上述したように、心配ないと感じている人は、60歳以上の人で74.1%にも達している。特に80歳以上では77.2%ときわめて高い割合を示している。しかし、その中でも家計にゆとりがなく、苦しいと訴える人は22.2%と、5人に1人は経済的に困窮している状態だと言ってよい。

60歳以上の人達の暮らし向きを見る限り、それ程苦しい状況ではないことが分かる。ここで少々、別のデータを照合してみよう。

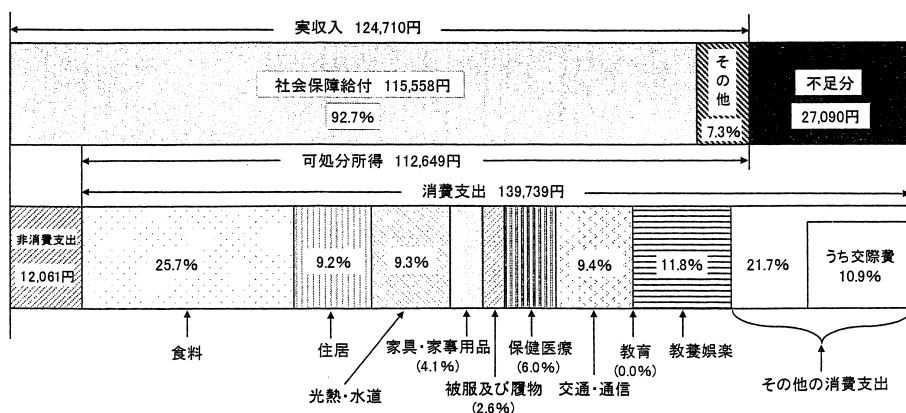
上述の図2から、50万から150万未満は23.2%であり、50万から200万未満の世帯では、全体で36.3%となっており、3世帯に1世帯が200万円未満の世帯である。

更に、図3、図4⁽⁴⁾の世帯の家計収支をみると、それぞれ赤字となっている。
 各世帯の消費支出の内訳は異なるけれど、平均してみると赤字の消費支出となっている。



- (注) 1 高齢夫婦無職世帯とは、夫65歳以上、妻60歳以上の夫婦のみの無職世帯である。
 2 図中の「社会保障給付」及び「その他」の割合(%)は、実収入に占める割合である。
 3 図中の「食料」から「その他の消費支出」までの割合(%)は、消費支出に占める割合である。
 4 図中の「消費支出」のうち、他の世帯への贈答品やサービスの支出は、「その他の消費支出」の「うち交際費」に含まれている。
 5 図中の「不足分」とは、「実収入」から「消費支出」及び「非消費支出」を差し引いた額である。

図3 高齢夫婦無職世帯の家計収支 2019年
 総務省統計局編『家計調査年報《家計収支編》』(令和元年20頁より)



- (注) 1 高齢単身無職世帯とは、60歳以上の単身無職世帯である。
 2 図中の「社会保障給付」及び「その他」の割合(%)は、実収入に占める割合である。
 3 図中の「食料」から「その他の消費支出」の割合(%)は、消費支出に占める割合である。
 4 図中の「消費支出」のうち、他の世帯への贈答品やサービスの支出は、「その他の消費支出」の「うち交際費」に含まれている。
 5 図中の「不足分」とは、「実収入」から「消費支出」及び「非消費支出」を差し引いた額である。

図4 高齢単身無職世帯の家計収支 2019年
 総務省統計局編『家計調査年報《家計収支編》』(令和元年20頁より)

図3の高齢夫婦無職世帯の年収は250万から300万未満の範囲であり、図4の高齢単身無職世帯の年収は100万から150万未満の範囲と考えられる。それぞれの世帯の家計収支が赤字となっていることは、不足分を何等かの手段で補填していることになる。

次に、生活を支える年金額をみると、標準モデル年金（令和2年度）は、国民年金は65,141円、厚生年金は夫婦合わせて、22万724円（老齢基礎年金も含む）である。平均の年金額（平成30年度）は、国民年金は55,708円、厚生年金は14万3761円となっている。

しかし、実際に受給している老齢年金の月額分布を藤田氏は次のように述べている、「では実際に高齢者は、どれほどの年金を受給できているのだろうか。2013年度末時点で高齢者が受け取っている老齢年金（国民年金および厚生年金）の月額分布をみると、最も人数が多いのは『6万～7万円』の間で、約460万人となっている。この額は、ちょうど国民年金の満額受給の月額と一致する。これをピークに『5万～6万円』が330万人、『7万～8万円』が320万人となっていて、全体の約6～7割の高齢者が月額10万円未満の年金しか受給できていないことがわかる。⁽⁵⁾そして、単身高齢者（65歳以上）の1か月の平均支出額は約14万円とすれば、多くの高齢者が一人暮らしであれば月あたり4万～7万円の不足分を貯蓄の切り崩しか、別の手段で確保しなければならない状況にあることを意味する、と述べている。⁽⁶⁾

就業状況のところでもみたように、高齢就業者の割合は高い。65～69歳の男性の就業者は58.9%、女性で38.6%であり、70歳～74歳の男性で41.4%、女性で24.2%である。要するに、働かないと生活の維持が難しいのが実情のようである。そして、私達は高齢になればなる程、病弱、怪我、病気、介護等の身体的・精神的諸問題に陥る可能性が高まる。健康で安定した生活を送っていても、いつ何時、不測の事態が生じるとも限らない。この予期せぬアクシデントが生活の破綻を導く。

老後の生活破産などは、自分と無関係と思っている人が多いのではなかろうか。然しながら、予測できないことが起きてしまうのが世の常であり、想像できない現実に向き合って、右往左往してしまう。

この老後破産の問題について、かつて「NHKスペシャル取材班」が、2014年9月に放送し、かなりの反響が寄せられたと言う。⁽⁷⁾これを参考として、老後破産について考えてみよう。まず、取材班のいう老後破産とは、次のようである、老後破産のきっかけとなるのは、高齢になれば誰にも起こりうる、病気や怪我などであり、特に一人暮らしの場合、医療費や介護費用は思い負担となる。重症化したり寝たきりになってしまうと、訪問介護や医療を受けなければ暮らしていけなくなる。⁽⁸⁾

これは誰もが避けることのできない日常のパターンかも知れない。そして、「その費用を自力で負担できない場合、生活保護を受けることになる。そうした追いつめられた状況にありながら、年金だけでギリギリの生活を続けている状況を『老後破産』と位置づけた

のだ」と言う。⁽⁹⁾

再三、くり返し述べてきたように、老後に思わぬ出来事に遭遇した時、私達の生活は一変してしまう。正しく老後破産に苦しむか、あるいは老後破産の危険が迫っていると言ってよいであろう。

このようにみえてくると、生活に不安なく安心して暮らしている高齢者でも、いつ何時老後破産に近い状態に陥ってしまう可能性がある。そして、「今、老後に漠然とした不安を抱く人は少なくない。しかし、自分の親や身近な人が『老後破産』しかねないことを想像できるだろうか。

『老後破産』は対岸の火事ではない。私たちのすぐそばで起きている日常なのだ」と言う。⁽¹⁰⁾

取材スタッフの中で何度も議論したのが、老後破産に追いつめられていく高齢者たちが、異口同音に発するのが「死にたい」という言葉だ、⁽¹¹⁾と言う。

未来への希望、期待も見出せず、今日一日の生活をどのように乗り切っていくかと思いついている高齢者にとって、生きるとは何であるのか。その重圧に耐えられない人にとっては、生きることは死以外の何物でもないのかも知れない。

次の文章をみよう、「預金もわずかしがなく、いわば『老後破産』寸前の状況にある高齢者の多くは生活保護を受けられるかどうか、ギリギリのラインで精神的に追いつめられている人が少なくない。その人たちから何度も聞くことになったのが『死にたい』という心の叫びだ。そうした声を受け止めるたびに、励ますことも、なぐさめることもできず、ただ聞くことしかできない自分を痛感する。」⁽¹²⁾

痛いほど分かる著者の心痛の思いである。切羽詰まったら、生活保護制度を利用し、老後破産を食い止めることができるかも知れない。しかし、生活保護の受給については、手続きのこと、世間体、自尊心のことなど、単純に事を進められないのが事実である。「生活保護を受けることになる、そのずっと手前で困窮している高齢者に手を差し伸べることができたなら、救われる人たちは大勢いるはずだ。そうした人たちが救われる社会が実現できる道筋が見えれば、『老いていく恐怖』や『老いていく罪悪感』が少しは和らぐかもしれないと思える」と言う。⁽¹³⁾

現在、世界の経済規模で第3位に位置しているわが国だが、このような高齢者の悲惨な状況をどのように受け止めればいいのか。先ほどのスペシャルのスタッフは、そうした人たちが救われる社会が実現できる道筋が見えれば良いが、と述べた。

老後破産を防ぐ手立てはないのか、また老後破産を救済する手立てはどうか。この問い掛けに対しては、やはり憲法第25条の規定に依るべきであると思う。第1項を基底にすべきことは当然であるが、注意を促したいのは、第2項で「すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と謳われているように、衣、食、住を含めた生活全般に関わることについて、社会福祉、社会保障等か

らの支援を増大させなければならないと述べていることである。

最低限度の生活水準に満たない人、あるいはその水準のところで困窮した生活を送っている人、その人たちに対して救済を施し、または生活支援を実施して行くべきであろう。具体的には、生活保護制度を柔軟に適用していくことであり、場合によっては、住宅費補助、医療や介護に関わる諸費用の減額等を行う。これらもきわめて重要な施策となりうる。

然しながら、少子高齢社会の進展、後期高齢者の増大を考えるとすれば、やはり抜本的な超高齢社会対策を考えていくべきであろうと思う。これについても、以前の『紀要』（第60号）の中で、最低保障年金制度を構築すべきではないかと述べた。

即ち、現在の老齢基礎年金は、最低限度の生活を営むには到底不可能である。生存権を具体化していくには、老齢基礎年金の額を引き上げ、スウェーデン型の最低保障年金に変更する。つまり、年金の給付額が一定水準に満たない低所得者のために、税金を財源とする最低保障年金の制度を創設する。そして、最低保障年金のみでは、生活に困窮する高齢者に対して、社会扶助の制度を用意する。1つは高齢者向けの住宅手当であり、もう1つは高齢者向けの生活保護であり、それにより、すべての国民は最低限度の生活が保障されることになる。

わが国では、全国民を対象にした老齢基礎年金の制度は整っている。この制度を応用・適用して、最低限度の生活水準を維持できる制度にする。私達の老後破産等の不安も解消され、所得に応じて将来の年金額も増えて行き、安心のできる老後生活と努力に応じた豊かな生活が保障される。⁽¹⁴⁾

最後になるが、憲法第25条の生存権を保障する別の考え方として、ベーシック・インカムのある考え方がある。ベーシック・インカムとは次のようである。「無条件で全員に対して個人単位で交付される所得であって、交付にあたっては資力調査や就労要件がない。」⁽¹⁵⁾

そして、ベーシック・インカムは、社会保障、社会手当、公的扶助など既存の所得保障制度に付随する各種の受給要件をすべて否定したところに最大の特徴がある、といい、性別、年齢、職業、配偶者の有無、などなど、これまでの所得保障が配慮してきた属性とはまったく無関係に支給されることを意味している、という。⁽¹⁶⁾ そして、「人間はすべて個人として扱われ、各個人に対して一定額が定期的に支給されるというのが、ベーシック・インカムの本旨である」と述べている。⁽¹⁷⁾

支給額は8万円を想定しているが、財政的反対論、道徳的反対論も存在する。ベーシック・インカムによって無条件に最低所得が保証されるとなると、誰も働かなくなってしまうのではないかと、という反対論である。⁽¹⁸⁾

ベーシック・インカムとは、いうなれば究極の保障制度といえる。国民すべてを対象にした制度であるゆえに、その制度を支える国民1人ひとりの福祉的観念が求められる。北欧、ヨーロッパ等の国々で福祉国家が目指された。その意図した趣旨は何であったのか。国民1人ひとりの幸福であり、安寧であった。そのために公平、平等が求められた。そし

てそれを実現するためには、分かち合いの精神が必要とされた。そのような制度を作りあげるのに、長い歴史の時間が必要であったことはいうまでもない。ベーシック・インカムを実現させるには、国民1人ひとりの覚悟が必要となる。

老年的超越について

2018（平成30）年2月7日（水）の朝日新聞の紙面に、衰えても幸せ「老年的超越」という文章が掲載された。当時111歳の渡邊智哲さんが紹介され、「老年的超越」の境地に到達されたのでは、との文面の記事であった。⁽¹⁹⁾

広瀬信義教授が、1月の訪問調査で長生きのひけつを問うと、渡邊さんは言った。「笑っていること。怒ることなど、ほとんどありませんね。」権藤恭之准教授たちが、70、80、90歳の高齢者たちを調査した結果によると、年齢が高いほど運動機能や認知機能は低かった。ところが、「老年的超越」という指標が示される幸せな感覚の度合いは、高齢の人ほど高い傾向があった。

老年的超越とは、高齢期に高まるとされる「物質主義的、合理的な世界観から宇宙的、超越的世界観への変化」のこと。自分が宇宙という大きな存在につながっていることを意識し、死の恐怖が薄らいだり、他者を重んじる気持ちが高まったりする状態とされる。

超高齢の人は、ひとりでいてもさほど孤独を感じず、できることが減っても悩まないようになり、周囲への感謝の気持ちが高まりやすいという。「成功」や「達成感」を重視する若いころとは異なる、穏やかな幸福感だ。⁽²⁰⁾

別の解説として、NHKスペシャル取材班による、脳の幸福力「老年的超越」脳が80歳からポジティブになる、をみてみよう。⁽²¹⁾

NHKスペシャル取材班は、世界各地のセンテナリアン（100歳以上の人）を取材した時、必ず次のような質問をした。「100年という長い人生の中で、いつがいちばん幸せでしたか。」センテナリアンたちは、「今がいちばん幸せ」という同じ答えだった、という。

例えば、イタリア人のエンマ・モラーノさん（116歳）は、若い頃は社交的な女性だったが、今はほとんど寝たきりの状態であったけれど、「人生の中でいちばん素敵な思い出はなんでしょう」と尋ねると、「今ここにいて、独り身でいることがいちばん幸せです」という答えであった。

このように、センテナリアンたちにみられるこうした心理的な特徴は、「老年的超越」と呼ばれている。それは決して特別な人だけにみられるものではないようだ。

加齢と共に身体の機能は衰えるが、精神的な健康はよくなっていくという「エイジング・パラドックス」は世界中で報告されている。そして、権藤准教授が目にするのは、「老年的超越」という心理変化だ。後述するが、スウェーデンの社会老年学者ラーシュ・トーンスタム博士が提唱した概念である。

老年的超越とは、ものの捉え方の変化が、加齢と共に増していくというもので、80～90歳にかけて顕著になっていくという。変化する程度には個人差があるが、誰にでもみられる現象だという。

権藤准教授の調査では、老年的超越が強まるにつれ、「幸福度」も上昇するという関連性がみえてきた。

認知神経科学が専門のマラ・マザー教授は、宇宙飛行士を例に「老年的超越」を次のように話した。「大気圏外から地球をみた宇宙飛行士の多くが、それまでの自己中心的な考え方から、自己を超えたような考え方、つまり、私たちはみなつながっているのだと認識する、という話があります。『老年的超越』も、人生のある段階に差しかかったときに、もうしばらくすると、自分は地球上にいなくなるんだと考えるようになり、自己中心的ではない、達観したものととのとらえ方に変化していくのだと思います。」⁽²²⁾

さて、老年的超越について、おおよそのアウトラインをみてきた。老年的超越とは、人間の成長・発達していくプロセスの最後の到達点なのだろうか。私たちの発達理論からみると、周知のようにエリクソンの自我の発達理論があり、乳児期から老年期までの8段階のプロセスの中で、その段階ごとの発達課題をクリアすることで、自我が発達していくというもので、最後の段階である老年期では、自我の統合が目標とされた。これまでの長い人生で、酸いも甘いもかみ分けた人生を全うして、自己存在を確立できた人は、自我の統合に到達した人と言ってよいであろう。

老年的超越とエリクソンの自我の統合との関係はどのように考えるべきであろうか。ただ老年的超越の状態としては、幸福感に満たされ、宇宙との一体感があり、物質的なものの否定、そして孤独の楽しみ、過去や未来の世代とのつながり、といったかなり具体的なイメージがあり、自我の統合とは違った心的現象のように思われる。

では、老年的超越を提唱してきたラーシュ・トーンスタムの考え方をみてみよう。⁽²³⁾

新しい理論の必要性

まずトーンスタムは次のような経緯を述べている。これまでの社会老年学が遵守してきた、サクセスフル・エイジング、離脱理論、ひきこもり等といった考え方とは違って、老年的超越理論は、高齢期にも発達は継続するとの立場を取る。

そして、これまでの高齢者像は間違ったイメージを植え付けられてきたのではないか。本当の現実を見るより、信じたい現実を見て、高齢者を哀れだと感じるために、彼等を虚弱で無力なんだと考える必要があった。

理論の起源と最初の概要

このように、トーンスタムは、老年的超越理論は高齢者理解への不確な知識と実証研究からかけ離れた洞察から生まれたものであるという。

我々は確実に年を重ねて行く。体験し、知識を増やし、知恵も付く。人間としての発達はどうか。

トーンスタムはそれについて、青年期以降の老年的超越へと向かうプロセスは、一生涯連綿と続き、発達は継続するという。

トーンスタムはエリクソンの発達モデルを度々、引き合いに出す。エリクソンは第8段階を「自我統合」と呼んだ。このステージでは、個人は成功や失敗に関わりなく、彼等の歩んできた人生を基本的に受け入れるようになる。個人は過去をふり返り、満足感を感じるようになる。この段階と私たちが老年的超越と呼ぶステージの違いはここにある、という。

上述したように、エリクソンは1段階から8段階ごとに課題を設定し、それをクリアすれば次の段階へと進み、それに応じて自我も発達していくというもので、自我統合の時点で発達は終了するということになる。

トーンスタムは、エリクソンモデルは自我統合の内に留まっているが、私たちのケースでは、老年的超越に到達するという違いがある、という。

そして、老年的超越への発達は以下の様相を呈する。⁽²⁴⁾

- ・宇宙の精神に伴う万物との親交の感覚の増加
- ・時間、空間、対象物に対する認識の再定義
- ・生と死に対する認識の再定義と、死への恐怖の減少
- ・過去や未来の世代との親密なつながりを感じる感覚の増加
- ・表面的な社会相互作用に対する興味の減少
- ・物質的なものへの興味の減少
- ・自己中心性の減少
- ・「瞑想」する時間の増加

宇宙との一体感、時間の観念の変化、対人関係との一体化、個人の生命から全体的な生命への移行、等々、これらの現象をどのように捉えたらよいのか。人生のプロセスのなかで、突然の出来事なのか、それとも何等かの契機が存在するのか、現在から超越へとその壁を乗り越えさせたものは何であるのか。

トーンスタムは、老年的超越は成熟と叡智の獲得に向けての自然なプロセスで、到達できる最終段階であるとみなされる、という。

老年的超越の質的内容 老年的超越への長い道のりを経てきた人との対話

トーンスタムは実証的研究を重視した。郵送、インタビュー等によって、様々な年齢層からの回答を分析した。

例えば、イエバ（女性、以前は看護師、インタビュー時、69歳）

以前の川の流りに呑み込まれていた人生と違って、今の人生そのものを川の流りの一部と受け止めている。また、イエバの時間の捉え方は、“人はいつも過去と未来に生きている”といい、過去、現在、未来といった境界を超越している。

また、過去の世代との血族関係の感覚について、「それは不滅、遺伝子の鎖が巻き付い

て行くようなもの」という。この遺伝子の鎖のなかで、イエバは永遠の生命というものをみている。そして死の恐怖はなく、次のようにいう、「ええ、死はまさに自然で生命の一部だから。」

超越者のイエバも他の多くの人も、人生の喜びは、よりささやかな普通の出来事であるという。それは日常の暮らしの中にみられる。

ある男性は次のように語った。「私は木やつぼみを見て、それが咲くのを見る。どのように散るのかを見て、葉っぱに私自身を見ている」と。これと関連するが、かつて、越後の僧、良寛和尚は次のような辞世の句を詠んだ。うらをみせ おもてをみせて 散るもみじ 散るもみじのなかに人生をみて、自分の一生を散るもみじにたとえた。

自然の体験や音楽、ドラマの経験が老年的超越の一部であったり、つなぎともなる。77歳の男性は、音楽の経験が感受性をいかにもたらすものになったかを述べた。超越できたのは、音楽と感情の間の障壁である、という。音楽のリズムと人の感情が融合するものであろうか。

トーンスタムは「老年的超越の兆候」というタイトルの下に、質的インタビューを3つの次元にまとめている。⁽²⁵⁾

宇宙的なつながりの次元

「時間と幼年期」 現在と過去の境界を超越する

「過去の世代とのつながり」 個人生活よりも生命の流れ（鎖）がより重要になる

「生と死」 死の恐怖がなくなる

「人生の神秘」 神秘を受け入れる

「悦び」 小さな世界を通して大きな世界を経験する悦び

自己の次元

「自己中心性の減少」

「身体的超越の発達」 身体のケアで悩まない

「自己超越」 利己主義から利他主義へ

「自我統合」 ジグソーパズルの断片が全体を形成すること

社会と個人の関係の次元

「意味の変化と関係の重要性」 表面的な交際は興味がなくなる

「解放された無邪気さ」 成熟さを促進

「近代的禁欲主義」 最小限の物的必要性で十分とする

「日常の叡智」 善悪の二元性を超越し、寛容の増加

宇宙的なつながりの次元では、個人の存在はより大きな存在に包摂される。時間の概念も、過去、現在、未来と言った直線的なものでなく、分節そのものが解消された状態のようである。

死の観念も永遠の生命に抱かれた者として、死の恐怖は打ち消される。

これらは、仏教の教えと重なる一面があるように思われる。我々の生命も大いなる生命から由来する。

自己の次元では、宇宙的なつながりの次元と関わり、境界線の内部に閉じ込められていた自己は分解されて、宇宙的な自己に代行されるという。個としての自己は重要な存在ではなくなる。

社会と個人の関係の次元では、物欲や名誉欲から解放され、己の居場所を知る。そして、善悪を超えた平穏な心境に至っている。

さて、トーンスタムは質的インタビューをまとめるに当たって、回答者は、様々な発達の兆候と段階を示しているといい、それを3つの次元に分類した。人によっては、宇宙的なつながりの次元にいる人、または自己の次元にいる人、など1つの次元にとどまっている人であったり、2つあるいは3つの次元にとどまっている人も存在するであろう。

それについて、トーンスタムは老年的超越への発達は、全ての歳を重ねる個人の特徴として、均一な発達は見られなかった、と述べている。そして、それを発達の可能性としてみるべきであって、老年的超越へ至る軌道はいくつかある、という。私たちは誰でも老年的超越の「種」を持っているが、成長するには適切な水やりが必要とされる、と述べた。

適切な水やりとは、何を意味するのであろうか。老年的超越に到達する上で、キーポイントとなるであろう。

最後になるが、トーンスタムは再度、エリクソンのモデルとの違いについて、次のようにいう。⁽²⁶⁾ 老年的超越理論は、エリクソンモデルの先を行くものである。エリクソンモデルは自我統合の内に留まっていて、過去という同じ世界観の中で起きている後ろ向きの統合プロセスである。しかし、老年的超越理論は、現実を再定義することを含めたより外向きのプロセスである。

さて、トーンスタムの老年的超越の具体的な内容について、ある程度、理解はできたように思われる。

人は誰でも、老年的超越に至る「種」を持っているというが、その種が芽を出し、花を咲かせ、そして、実を实らせることになるが、その一連のプロセスのなかで、何が契機となって老年的超越に至らせるのか。

契機となり得るものとして、次のものが挙げられている。人生の危機、自然との触れ合い、音楽や芸術との出会い、本との邂逅、瞑想の時間、などトーンスタムは様々な種類の途を提示している。これらの契機は、老年的超越へと指向する精神に喚起を促す力となり得る。しかし、それだけで老年的超越へと辿り着けるものであろうか。

特に、宇宙的なつながりの次元を考えた時に、何か違ったものがその背景にあるのではないか。老年的超越を醸し出す背景ともいってよいが、そのような作用が働いているように思われる。

唐突に聞こえるが、かつて、森有正氏がフランスに滞在中、氏自身を変貌させた「経験」

という思想的な営為のことであり、この「経験」こそが老年的超越を醸成する背景を成しているのではないかと思う。

森有正氏は次のように言っている。「私はこの長期に亙る一種の《隔離状態》を通して、自分の『経験』ということに決定的に気がついたのである。それは私にとっては決して一つの心理的状态であったとは思っていない。それは一寸変にきこえるかも知れないが、自分の生きているこの現実そのもの、そこにある凡ゆる客観的なもの、主観的なもの、そういうものを凡て含んで、この現実そのものが一つの経験なのだ。」⁽²⁷⁾ さらに次のように言う、「経験は『私の』経験という形では問題にならなかった。自分のことも、自分の周囲のことも、日本のことも、それら凡てを含んで、それは一つの経験である、という発見であった。重ねて言うが、それが『私の』経験であったというのでは全然ない。それは、私にとって『現実』そのものが経験であるということであり、また逆に『経験』は『現実』そのもので『ある』ということである。」⁽²⁸⁾

端的にいうと、そういう現実があるからこそ、老年的超越へと行けるのである。例えば、宇宙の精神に伴う万物との親交の感覚の増加とか、過去や未来の世代との親密なつながりを感じる感覚の増加、等といったことを感じさせる現実があるからこそ、そのような感覚を呼び覚ますのである。それは西欧的なものに限らず、日本の風土にも、当然、当てはまる。

再度、良寛和尚の話で恐縮だが、次のような歌がある。

形見とて何か残さん春は花山ほととぎす秋は紅葉もみじば

(残すとすれば、春は花、夏は山のほととぎすであり、秋はもみじの葉の、美しい自然そのものこそ、私の命として残したいものです)。⁽²⁹⁾

良寛にとっては、自分の住む周りの山川草木が己れの存在であった。四季の移ろいに死を感得し、そこに帰っていく自己は自然となる。

さて、老年とは何であるのか、老年を問うのは、人間とは何であるのか、と同じ意味である。ただ歳を重ねたから老年というわけではない。四苦八苦の人生のなかで、「老いとは幸運の積み重ねの結果迎えられるもので、老いは幸運の果実である」⁽³⁰⁾ という文章に安堵感を覚える。

何千年という樹齢に比べれば、人の寿命ははかないものであるが、人それぞれその人に託された役割があり、それを果たすことで、十分、価値のある人生を送ることができたのではないか。

保坂氏は老いの倫理として、それぞれの人々が持てる力を出し尽くそうという強い意思と
いっている。⁽³¹⁾

それに一言、付け加えらるとすれば、虚偽等を排して、正道を広げること。

注・参考文献

- (1) 内閣府編『高齢社会白書』(令和2年版)、2020年、日経印刷、2-25ページまで参考とした
- (2) 同上、17ページ
- (3) 同上、25ページ
- (4) 総務省統計局編『家計調査年報《家計収支編》』(令和元年)、2020年、20ページ
- (5) 藤田孝則『続・下流老人 一億総疲弊社会の到来』、2016年、朝日新聞出版、29-30ページ
- (6) 同上、30-1ページ
- (7) NHKスペシャル取材班『老後破産 長寿という悪夢』、2015年、株式会社新潮社、16ページ
- (8) 同上、13ページ
- (9) 同上、13-4ページ
- (10) 同上、17ページ
- (11) 同上、17ページ
- (12) 同上、37-8ページ
- (13) 同上、151ページ
- (14) 岡崎強『持続可能な超高齢福祉社会を目指して』、名古屋経営短期大学『紀要』第60号、2019年、102-3ページを参照
- (15) 武川正吾編『シティズンシップとベーシック・インカムの可能性』、2008年、法律文化社、20ページ
- (16) 同上、25ページ
- (17) 同上、27ページ
- (18) 同上、33ページ
- (19) 112歳になった渡邊智哲さんが、2020(令和2)年2月12日、世界高齢の存命中の男性として、ギネス世界記録に認定された。しかし、2月23日にご逝去された。
- (20) 朝日新聞、朝刊、2018年2月7日
- (21) この部分に関しては、NHKスペシャル取材班『百寿者の健康の秘密がわかった 人生100年の習慣』の第6章脳の幸福力「老年的超越」脳が80歳からポジティブになるを要約・引用させていただいた。
NHKスペシャル取材班『百寿者の健康の秘密がわかった 人生100年の習慣』、2018年、講談社、157-181ページ
- (22) 同上、180ページ
- (23) ラーシュ・トーンスタムの老年的超越の概念については、トーンスタムの著書『老年的超越 歳を重ねる幸福感の世界』を要約・引用させていただいた。(特に序章から第3章まで) 1-80ページ
Lars Tornstam. GEROTRASCENDENCE: A Developmental Theory of Positive Aging (New York, 2005) 富澤公子・タカハシ マサミ訳、『老年的超越 歳を重ねる幸福感の世界』2017年、晃洋書房、1-80ページ
- (24) 同上、43ページ
- (25) 同上、77-8ページ
- (26) 同上、79ページ
- (27) 森有正『経験と思想』1977年 岩波書店 18ページ
- (28) 同上 18-9ページ
- (29) 中野東禅『良寛詞歌集』(編集: NHK出版) 2015年 NHK出版 99ページ
- (30) 中村元『「老いと死」を語る』2000年 麗澤大学出版会 96ページ
- (31) 同上 107ページ